い。とすると、「梓弓まゆみ」は何を表すのか。ここで注目すべきは、大山守が水に落ちた時、宇治稚郎子の兵達が一斉に立ち上がって弓矢を構えたと語られていることである。a・a′は弓矢を構える兵達を表すのであり、bはその兵達に反撃することができなかった大山守の無念を表すと見られるのである。歌い手は宇治稚郎子の兵達を表す景を眼差しているうちに、死者に憑依されて大山守の心を表しているということだが、その転位はa・a′に響く宇治稚郎子達の嘲笑が導くのである。歌い手はその嘲笑に巻き込まれて大山守の無念を表し、そのことが宇治稚郎子達の一層の快哉を表すことになるのである。記51が大山守鎮魂の意味を持つとすれば、大山守に対する残酷さにおいてである。記歌謡の音は、記歌謡の異常さ・激情を露にするのである。倭建の死を悼む后達の記34「なづきの田の　稲幹に　稲幹に　這ひ廻ろふ　野老蔓」にしろ、后達が倭建の死骸にまとわりつくのを表す第三者的な景の表現に終始するが、そこに響く后達の哭泣が后達の、更には倭建の激情を表している。

小特集・古代文学研究の現状と展望

文字の世界の向こうへ

真下　厚

シドニーオリンピックの競技がテレビで盛んに放映されていたとき、画面から聞こえてくるニッポン、ニッポンという声が耳についた。「日本」はニッポンなのか。だが、ニホンともいわれる。この国では、いま、文字のみが定められ、その音は制度的に定められているわけではない。人の名も同じだ。出生届の際、役所の戸籍担当者が細心の注意を払うのは文字についてであって、その訓みではない。名前の音は戸籍には記載されないのだ。このように、我々は、黙読を常とする社会にいるだけでなく、法的にも文字のみを定める文書主義の世界にあり、そうしたあり方を当然であるかのように受けとめてきた。

しかし、古代以来長く、文字には声が分かち難く結びついていた。また、記された文字は僅かなものであり、その向こうには厖大な量の声のわざが広がってもいた。

古代において、とりわけ韻律あることばが生成されるとき、それは声を主とするものであった。これが文字に記されて享受されるような場合でも、人々は特別な、あるいはくぐもった声で音声化しながら享受した。

今日、その文字の面については精緻な研究が重ねられてきたが、それに比して声の側面については、残念ながらこうした段階にまでまだ及んではいない。もっとも、それは、声は復元できず、不可知のものであるため、確かな研究をうち立てることがむずかしいからでもあろう。また、日本の口承文芸についての研究そのものが声の表現を文字に置き換えることによってなされがちであったことも間接的には関わっていよう。

しかし、今日でも文字によらないでことばのわざを生み出す社会が世界各地に存しており、そうした研究も積み重ねられてきた。我々はそのわざの仕組みや生態をこうした社会から学び、日本古代の文字を通して見出されることばのわざの世界において共通する点を求めてゆくならば、この分野の研究を切り開いてゆくことができるのではないか。

その際、声の世界についての調査・研究の成果を文字によって読み、単にそれを利用するというのでなく、自らも大海に漕ぎ出して声々を聞き、その生態をよく観察して生成・流動の法則を求めてゆくことであろう。また、こうした分野の研究者たちとの共同研究という方法もあろう。声の世界は複雑にして深い。その研究成果を読むだけでは、その生態に届かないことが多い。

この大海に舟を出そうとする場合にも留意せねばならないことがある。わざあることばは一地域に孤立して存するのでなく、多くは他地域から伝播してきたものだ。また、ことばのわざは他のさまざまなことばと関わってはたらくのであり、そうした生態をこそよく観察しなければならない。だから、たとえば歌なら歌のみを調査・研究するのでなく、声の世界のことばのわざ全体を知る必要がある。

古代の豊かなことばの世界にたどり着くため、困難で迂遠な道ではあるが、こうした総合的・共同的な研究を今後さらに推し進めてゆくことではないか。

小特集・古代文学研究の現状と展望

仏教説話研究からの跳躍——『日本霊異記』をめぐって——

三品泰子

『日本霊異記』は、日本における仏教説話集の嚆矢とされ、先行する中国の仏教説話集や日本の後世の説話集との間の書承関係が指摘されてきた。その一方で、『霊異記』がどのような同時代言説との関係性のなかに息づいていたのかは、まだよく見えていない。同時代言説との関わりにおいて、「仏教説話集」とは別の、なんらかのネットワークの中で『霊異記』を捉えることはできないだろうか。

例えば『霊異記』は、各説話の冒頭で年月日を明記し、時代順に説話を配列した、一種の年代記である。この点に注目すると、津田博幸氏「歴史叙述とシャーマニズム—『日本書紀』を中心に—」(『日本文学』一九九九・五)・「和歌とシャーマニズム—『日本書紀』をめぐって—」(『国文学』二〇〇〇・四)が論じる歴史叙述の問題とも重なる。

津田氏は、『日本書紀』の歴史叙述の問題として、聖徳太子の段階で知の境位が上がり、それ以前と以後とでは、未来を読み解く知の緻密さや回路の多さが違うということを指摘する。